

北限のサルに魅せられて

松岡史朗[†]（ニホンザル・フィールドステーション事務局長・青森県獣医師会会員）

光陰矢の如し。時の流れは無常にも早く、50歳半ばに差し掛かっている。マラソンに例えるなら、折り返し点を過ぎ勝負どころといったところか。振り返ってみるに、人生の岐路やここの一番は過去にも何度かあった。実年の今、改めて感じ入るのは、来るべき将来に向けて自らを鼓舞する気負いだけなのかもしれない。

関西地方の山間部で育ち、幼いころから生き物好き、蝶に始まり犬・猫まで、小さな命と接した数は数え切れない。動物の体のしくみに感心したり、その暮らしぶりの不思議さに驚いたり、手の中ではかなくも閉じる命の終焉を幾度も体感。獣医学を目指した素因はすでに少年時代に培われていた。獣医師の方なら多かれ少なかれ似たような経歴だろう。

本州最北、青森県下北半島の小さな漁村に移り住み25年になる。過疎化が進む寒村への移入者は珍しく、村人の目には変人と映ったに違いない。世界最北限に生息するニホンザルや特別天然記念物のニホンカモシカなど、この北の半島は、動物写真家という一風変わった職業に就いた私にとって、輝く野生の命に満ち満ち、魅力あふれるワンダーランドであった。

「ボスザルはいない。」ニホンザルの社会はボスと呼ぶ雄ザルが支配統率するピラミッド型の縦社会との認識が根付いていた。私も疑っていなかった。しかし、北国の四季折々変化に富んだ自然の中、サルの群れを追い、彼らと濃厚な時を共有していると、野生のサルからまったく違う暮らし方が見えてきたのである。

指導力、危険からの回避、群れの防衛、繁殖など、何かにつけて万能なのが縦社会のボスザル。人間社会の権力闘争の比喩としても反映されてきた。ところが、種付けを独り占めにし自らの子孫を繁栄させると思っていた繁殖において、何もボスザルが独占することにならないことがDNA鑑定による父子判定から証明された。風来坊のハナレザルが父となる場合もあり得たのだ。

また、群れの移動時、ボスが率先して行先を決定し、群れの仲間を先導するかのよう印象がある。この行動も、一頭一頭個体識別をしておいた観察から、先頭を切るサルが日ごとに違っており、ボスザルだけが旗振り役でないことが判明した。

厳冬期の寒さや風雪からの回避では、年老いた雌ザル

の豊かな経験がものをいう。刻々と変化する天候を読み、吹雪から身を守る風の当たらない谷間へと群れを導く。長く生きてきた経験とそれに培う仲間からの信頼には、たとえ体格が立派で鼻息荒く闊歩する雄ザルといえ一目置くところなのだ。そして、決定的な違いは、野生のサルは仲間を認め仲間に認められる、頼り頼られる横型社会であることだった。

では、いったいなぜ、ボスザルの存在がサル社会に定着したのか。それはサル学の発展に起因する。餌付けしたサル山公園や動物園など閉鎖環境下、限られた狭い空間で、限られた量の餌をもらう事態に陥ると力の強いボスザルが出現する。こうしたサル社会がいち早く紹介され一般化していた。その後、野生のサルの生態の調査研究が進み、ボスザルの特異さを指摘、現在ではボスザルはいないということが定説となっている。ただ、野生のサルの群れを閉鎖環境で飼育すれば、従来の横型社会は一変、ボスザルが出現する縦型社会へと変わってしまう。人の介入が野生動物の暮らしを大きく変貌することを物語る。

天空を優雅に旋回するクマタカ、人知れず咲くクマガイソウの大群落、おおっと思わず声を上げることもしばしば。サルに連れられ山深くまで踏み込む。未知の森でぞくぞくと怖れを抱く瞬間もあるが、これも山の精のなせる業なのだろう。サルの暮らしを見つめ、自らのサル観や自然観を熟成させる、行き着くところ人生観まで及ぶ。サルから学ぶことで自身が形成されていく。こうした好奇心の追求こそがフィールドワークの醍醐味なのだ。

松岡史朗

—略歴—

- 1977年 麻布獣医科大学卒
- 1985年 青森県むつ市脇野沢に移住。北限のサルの撮影、観察を開始。
- 2004年 NPO法人ニホンザル・フィールドステーション事務局長に就任。ニホンザルの保護管理等に組み込む。



[†] 連絡責任者：松岡史朗（ニホンザル・フィールドステーション）



むつ湾を臨むニホンザル



野生の子ザル

近年、下北地方に限らず全国各地でサルと地域住民との軋轢が社会問題となっている。猿害だ。土作りから始まり、丹精込めて作った農作物をサルが根こそぎ荒らしていく。下北地方では、初夏のジャガイモから始まり、カボチャ、豆類、トウモロコシ、そして初冬のダイコンと、季節の旬を食べ尽くす。収穫の喜びは農業の基本だが、楽しみを奪われた痛手は大きい。また、民家や神社へ侵入し食べ物を物色する被害や、サルによる強烈的な威嚇を受け怖い思いをした人も少なくない。サルを同じ風土に暮らす仲間として認めてやりたい気持ちよりも、厄介者として憎しみだけが増幅する。「何とかしてほしい」の声があちらこちらから聞こえてくる。なぜ、こんな事

態になってしまったのか。

森林の伐採、植林に伴う環境の改変、天然記念物としての保護、過去に実施した餌付け、天敵がないなどなど。下北のサルの増加の原因の解明は進んでいる。あとは対策だけだが、電気柵の設置、野猿監視員の出動など、あの手この手を駆使してその対応に追われてきた。しかし、期待するほどの効果は上がっていないのが現状で、より問題を深刻化させている。畑や民家周辺からサルを追い上げるモンキードッグの活躍にわずかな光明を見出すが、私にとって悩ましく頭の痛い時代となっている。

(写真は著者撮影)